

平城宮第一次大極殿 基壇復原の再検討

はじめに 1970・71年の第69・72次北調査と昨年おこなった第295次調査によって、平城宮第一次大極殿遺構の全貌が明らかになった。第一次大極殿の遺構は、奈良時代後半の大規模な整地造成と新築事業によって、基壇土がほぼ完全に削平され、地覆石の痕跡を残すのみである。しかも、第69・72次北調査では、地覆石の据付掘形と抜取痕跡の差異をほとんど識別できていない。これに対して、大極殿の西側1/3を全面発掘した第295次調査では、北半で地覆石の据付掘形と抜取痕跡を明確に峻別して検出した。その結果、平面と基壇形状に関する再検討が必要となり、1998年11月18日に「大極殿平面検討会」を開催した。その成果をもとに、身舎梁間の柱間寸法と二重基壇の問題を整理しておきたい。なお、大極殿の遺構は、その完成期にあたるB1期の状態（『年報1999-Ⅲ』：4～23頁）で分析する。

西面階段遺構からみた大極殿の平面 『平城報告XI』では、大極殿の建物規模を東西153尺×南北70尺（柱間は桁行17尺、梁間18尺、庇の出17尺）、基壇規模を東西180尺×南北100尺（基壇の出は桁行13.5尺、梁間15尺）に復原している。その後、平城宮大極殿遺構と大官大寺金堂・講堂および恭仁宮大極殿遺構を比較検討した小澤毅は、平城宮第一次大極殿の建物規模を東西149尺×南北66尺（柱間は桁行17尺、梁間18尺、庇の出15尺）、基壇規模を東西181尺×南北98尺（基壇の出16尺）に復原する新説を提示した（小澤毅「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」『考古論集』1993：621～643頁）。1/100模型から実施設計に至る復原案は、一貫してこの小澤説を踏襲している。

ところで、第295次調査では、北面西階段と西面階段の遺構を確認した。薬師寺や野中寺塔跡などの類例にみるように、「階段地覆石の心」＝「身舎柱の心」という前提が成立するならば、二つの階段の幅（抜取痕跡の心々間距離）は建物の平面復原に大きく影響する。とりわけ問題となったのは、西面階段の幅である。北面西階段の幅が17尺で、他の北面階段と同寸法なのに対し、西面階段の幅が17.5尺という微妙な値を示したからである。この寸法からは、身舎梁間の柱間寸法は17尺とも17.5尺と

も18尺ともとれる。そこで、抜取痕跡内に納まる地覆石の位置と幅寸法ならびに基準尺を調整して、身舎梁間の柱間寸法・庇の出・基壇の出を算出する方法を基壇北西部にあてはめ、建物と基壇の規模を推定した（図1）。

この算出方法によると、身舎梁間の柱間寸法が17尺となるのは、(1) 基壇の出が平側17尺、妻側15.5尺（基準尺は1尺=296～297mm）と、(2) 基壇の出が平側・妻側ともに16.5尺（基準尺は1尺=295mm）の場合であり、18尺となるのは、(3) 基壇の出が平側・妻側ともに16尺（基準尺は1尺=295.4mm）の場合である。常識的に考えて、四面庇の大極殿は入母屋造もしくは寄棟造の建物と推定されるから、基壇の出が四面均等な(2)(3)が妥当な復原案といえる。しかし(2)の場合、基壇地覆石の幅が2尺前後と大きくなって、現状の抜取痕跡よりも幅広となる。一方、(3)の場合、地覆石の幅が1.2尺程度で、抜取痕跡のなかに納まる。以上からみて、(3)の案が最も妥当であり、それは小澤の復原案と一致する。

基壇の形状 第295次調査で検出した地覆石据付掘形は幅約130～160cmで、基壇外側が浅く内側が深い二段掘りとする（深さ15～20cm）。したがって、地覆石外側下面に延石はなかったことになる。抜取痕跡は幅40～50cm、深さ10～15cmで、据付掘形の二段掘り部分の中央に位置し、壁はほぼ直にたちあがる。地覆石はこの抜取痕跡内に納まるはずだから、幅は1.2～1.3尺程度と考えざるをえない。この場合、基準尺は1尺=295.4mmとなる。また、抜取痕跡には凝灰岩片が多量に混入しており、地覆石には凝灰岩を用いたことがわかる。

以上検討してきたように、地覆石の幅はわずか1.2～1.3尺程度しかとれない。ところが、西面階段の出は少なくとも14尺を測る。古代建築の場合、一般的に階段勾配を45度（1尺勾配）として基壇高を復原するが、大極殿の場合はそれよりも緩い勾配であった可能性が高い。第一次大極殿を移築したという恭仁宮大極殿遺構の階段勾配は、出土状況で6寸弱、復原勾配でも7寸程度にすぎないからである（京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1978：1～72頁）。階段勾配を6寸～1尺とすれば、基壇高は8.4尺（2.48m）～14尺（4.14m）となる。いずれにせよ、一重基壇とすると成6尺以上の羽目石が必要となり、幅1.2尺ほどの地覆石では支えきれないだろう。一方、上部構造との関係をもみても、組物を三手先とした場

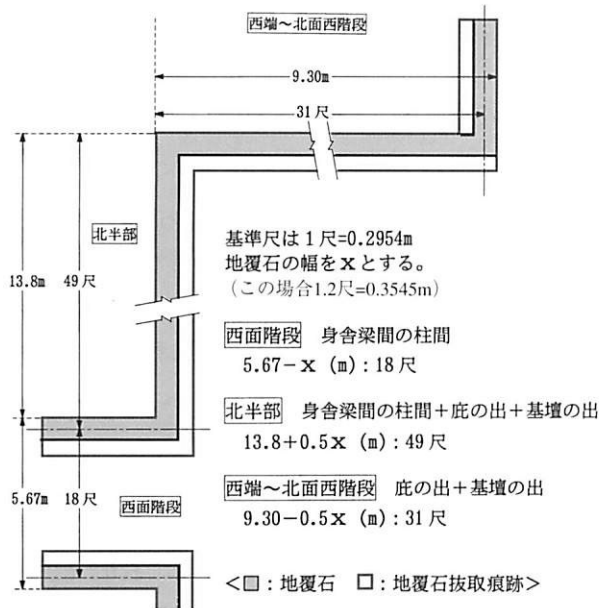


図1 建物・基壇規模の算出方法模式図 [(3)の場合]

合、軒の出は構造上16尺程度が限界であり、一重基壇では基壇端が雨にぬれる。しかし、これを二重基壇とすれば、雨水は下成基壇にのみ落ちて上成基壇に影響しない。また羽目石も二段の短い石材に分割できる。以上から、二重基壇に復原すべきと考えた。

ところで、日本での二重基壇には飛鳥寺、法隆寺金堂・五重塔、檜隈寺、坂田寺などの実例があるが、坂田寺以外は上成基壇の方が下成基壇よりも高く、基壇の出も大きい。これは、下成基壇が地形の標高差の修正や犬走りの役割を果たしたためと推測される。一方、中国における二重・三重基壇は、下成と上成で基壇高にほとんど差がなく、下成基壇を高くする例も少なくない(大明宮含元殿・麟徳殿の復原例を参照)。第一次大極殿の場合、とりわけ大明宮含元殿と空間構造が近似しており、二重基壇の構造も、日本の遺構例に倣うだけでなく、中国の類例を参考にして、以下の3つの復原案を考えた。

①下成高7尺・出5尺、上成高2.8尺・出11尺(図2)

下成基壇を最大限高くして、階段に踊り場を設ける案。高欄は下成・上成の両方にめぐらせるが、階段には付けない。踊り場の奥行を決めて、階段勾配を6～7寸におさめた。塼積擁壁下側からの眺望を意識し、踊り場などは中国宮殿の基壇様式を参考にしてしている。

②下成高4.9尺・出3尺、上成高6尺・出13尺(図3)

高欄を正面からみて重ならないように二重にまわし、しかも上成・下成の高さの差をできるだけ少なくした案。階段勾配は6寸で踊り場は設けない。①ほど乱雑にみえず、上成と下成のバランスがとれている。

③下成高4.5尺・出4尺、上成高7尺・出12尺(図4)

上成基壇を下成基壇よりも高くする復原案。階段勾配

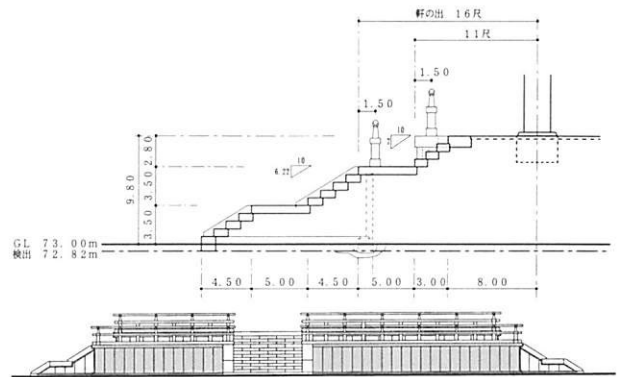


図2 案① 階段部分断面図(1:200)・東立面図(1:500)

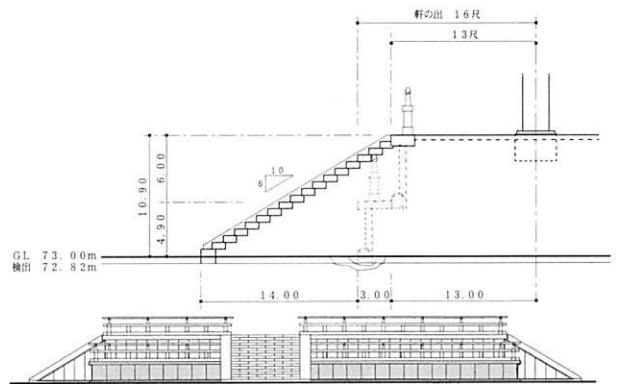


図3 案② 階段部分断面図(1:200)・東立面図(1:500)

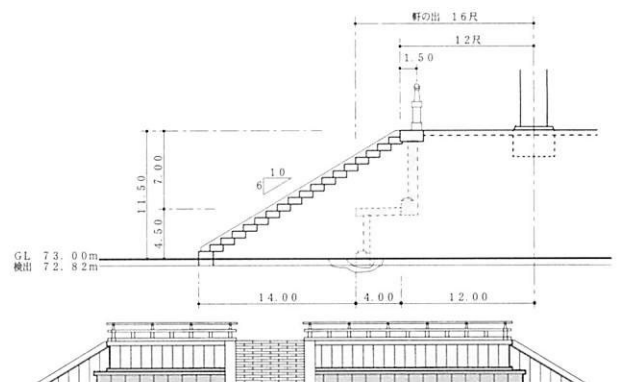


図4 案③ 階段部分断面図(1:200)・東立面図(1:500)

は6寸で、踊り場は設けない。下成基壇の役割は犬走りに近く、高欄は上成基壇にだけ付ける。法隆寺金堂を参考にしたが、上成基壇の地覆石を安定させるため、下成基壇の出と高さを大きくとった。

実施設計案としては、これまで検討してきた大極殿本体との調和を尊重し③を選択したが、塼積擁壁との関係性では、①②の案のほうが優れているといえなくもない。唐の直接的な影響を受けていた8世紀初頭の都城制において、宮城のシンボルたる大極殿の基壇と建築がどのような意匠と構造をしていたのか。第295次調査で新たに得た情報は、基壇だけでなく、大極殿の全体イメージにも再考を促す契機をもたらした。

(蓮沼麻衣子・浅川滋男/平城宮跡発掘調査部)